

1 名古屋大学

Nagoya University

名古屋大学フォーミュラチームFEM

Nagoya University FormulaTeamFEM

<http://nagoya.fem.jp/>



「連覇」を掲げた1年間



今回の総合結果・部門賞

- 総合20位 ●ベスト・サスペンション賞3位
- ベストラップ賞2位

Profile チーム紹介・今までの活動

名古屋大学フォーミュラチームFEMは、2003年11月に発足し、第2回大会から参戦しています。今回で12回目の大会を迎え、昨年悲願の総合優勝を果たすことができました。今年は昨年の勢いそのままに「連覇」を目標に、この1年間活動を続けてきました。

Team-member チームメンバー

西尾 俊亮 (CP)

鈴木 達也 (FA)

小林 吾一、濱田 翔多、小林 哲朗、瀧 春菜、田中 智也、西海 友祐、宮ノ原 健太、三島 直子、三久 保珠、山田 陽平、吉野 公美、譜岐 侑大、小林 義典、稲留 義朗、沼田 修佑、小杉 泰生、内田 悠斗、山口 健太、宮内 智寛、中安 悟、宮島 雅治、久野 僚介、永田 裕宣、柴山 瑠輝、高木 新、米田 一紀、藤川 千瑛、三下 純平、楠直 純、前川 祐太、吉田 悠樹、中神 壮馬、石田 陸、定行 潤司、鈴木 奨、杉浦 圭、中田 壮哉、中野 匠望、藤井 海斗、村瀬 健太、脇屋 照士、中野 壮毅、西岡 恵祐、小杉 直、早崎 雄太、中尾 海斗、安部 英和、廣岡 千鶴、豊島 義弘、富田 佑央

Sponsors スポンサーリスト

アイシン・エン・ダブルユ、IDAJ、IPG Automotive、アクティブ、AZAPA、旭化成建材、旭千代田工業、ISOWA、岩倉溶接工業所、ウエストレーシングカーズ、ウメオカ、エイ・ダブルユ・エンジニアリング、エイティ・エス、エーモン工業、エスエスモールド、NS Welding、NTN、江沼チキン製作所、OZ S.p.A、オートバックスセブン、岡島パイプ製作所、カーベック、カエルナラ、加藤カム技研、加藤ギヤ製作所、瀧部製作所、河村工機、CAST、キャリオ技研、キャウセイ(交通大学共和、協和工業、共和電業、呉工業、興研、幸田サーキット YRP 桐山、興和工業、KOBELCO、コピトシステム、サイバネトシステム、笹野商店、シーソーアイ、CTS TRADING Incorporated、SHORAI JAPAN、スウィング、住友電装、スリーポント、ソリッドワークス・ジャパン、第一測範製作所、タカタ、中央発條、中部工業、テクノイル・ジャパン、テンソー、東日製作所、東邦テックス、トップラインプロダクト、中澤鋳造所、西日本高速道路エンジニアリング関西、日信工業、日本ワイヤイグレイド、日本軽金属、日本研紙、日本トムソン、日本発条、日本バーカラジック、ネクスト、ハイレックスコーポレーション、ひびき精機、ファッションミヤマ、富士精密、藤田蝶子、藤本サービス、古藤工業、フレニー技研、プロテクト、ヘンケル、ボーイング、ポリプラステック、ホンダドリーム名古屋西、ホンダマイスタークラブ、マキタ、ミスミ、ミルインターナショナル、ムーエンジニアリング、モリキエンジニアリング、RAMPF Group Japan、ワールドワーク

Presentation

プレゼンテーション

私たち名古屋大学フォーミュラチームFEMは、「速くて誰でも安心してドライビングを楽しめるマシン」こそがアマチュアサンデーレーサーが求めるマシンであると考え、このような特徴を具現化する車両、「Formula Entertainment Machine」を開発コンセプトとしました。具体的には、昨年のテーマから発展させて「限界性能・安定性・速応性」に優れ、かつどのような走行状況でも運転に集中できる「快適性」を併せ持った車両を作ること、をテーマにFEM-12の設計・開発をしてきました。

車体全体でいうと、各パーツの剛性を重点に置きながら、各パーツレイアウトの再考や軽量化を行なうことで、昨年に比べて格段に重心高を低く、ヨー慣性モーメントを減らすことができました。その結果、回頭性の良い、安定した走りができる速い車両を開発することができました。

車両の改善には十分な走り込みが必要と考え、小さな問題はあったものの4月初旬にはシェイクダウンを終え、その後基礎的な定常状態でのテストや実践的な領域でのデータ取りなどを重ねました。その結果、大会前の試走会ではトップタイムを取るなど、確かな実力をつけていくことができ、チーム歴代最速の車両を作ることができたという自信を持って大会に臨むことができました。

Participation report

参戦レポート

今年度は2年連続の総合優勝をめざして第13回大会に臨みましたが、得点配分の大きいエンデュランスでリタイアしてしまった結果、目標としていた連覇を果たすことはできませんでした。しかし、そのエンデュランスでは昨年度車両よりも速いタイムで安定して走行することができ、日本車最速の車両を作り上げたことを証明することができました。また、各静的審査、動的審査ともに安定した結果を出すことができたのもチームの総合力の高さを示していると考えています。

一方で世界の壁を実感した大会でもありました。大会前には十分な走り込みをしていた分、最後に信頼性に泣かされるという結果は非常に悔しいものであり、またそれ以外の動的審査・静的審査ともに最後の詰めをやりきれなかったことが、そのまま各審査の順位に繋がってしまいました。この悔しさを胸に、来年度大会に向けては今大会で課題となった部分をしっかりと分析し、それを踏まえたうえで更なる進化をめざしていきたいと思えます。そして再び総合優勝を果たしたいと思えます。

最後になりましたが、1年間チームを支えていただきましたスポンサー様、先生方、OB含めた関係者の方々、そして大会運営に尽力をしてくださいました皆様に厚く御礼申し上げます。

Team-Movie <http://www.jsae.or.jp/formula/jp/13th/movie/1.html>